ジュラシック・トーク

「EP」って、なに？

最近、音楽業界関係で「EP」という言葉を耳にすることが多くないですか？ 特にラジオのパーソナリティなどは、「〇〇さんの新しい EP から、1 曲お送りしましょう」などと、ごく普通に言ってますよね。もちろん、そこでインタビューを受けているアーティストたちも、「今回の EP は」などと言っているのですから、これはもはやその世界では確実に多くの人に知られ、使われる言葉になっているな、と実感できるようになりました。

もちろん、ここで使われている「EP」というのは、「アルバム」と呼ぶには曲数が少ない CD、あるいは、それと同じ曲目でまとめて配信されているデジタル・データのことです。つまり、かつては「ミニアルバム」、あるいは「マキシ・シングル」と呼ばれていたものと全く同じものを指し示す言葉になるのですよ。この業界、新しい言い方が登場すると、すぐさまそれに飛びつく、ということが日常的に起こっていますが、これもそれと同じ現象ですね。要は単なる「ファッション」なんですよ。全く同じ物でも、ネーミングが変わればちょっとおしゃれに見えるだろうという浅知恵です。「ジーパン→デニム」、みたいなものです。

もちろん、この言葉は、音楽ビジネスの先進地、アメリカからやってきました。というか、アメリカで使われているから、ちょっと広めてやろう、という人がいたのでしょうね。それは図に当たり、今では（たぶん）日本中に「EP」が蔓延することになりました。ありがちなことですが、その言葉を使う時には、その語感に酔うだけで、元の意味を知る（知ろうとする）人など、特に若い人にはほとんどいなかったはずです。さっきの「デニム」にしても、「デニムはジーパンの素材なんだよ」なんて言ったら馬鹿にされるだけです。

ただ、昔から「レコード」によって音楽に親しんでいた人にとっては、これほど懐かしい言葉もありませんでした。私もそんな一人、レコードと言えば「LP」がその代名詞になりますが、それとともに、世間では「EP」と呼ばれていたレコードもあったのですよ。それは、LP よりも小ぶりで、短い曲が表と裏に 1 曲ずつ入っている、「シングル盤」、あるいは「ドーナツ盤」と同義語だと認識されていたレコードでした。

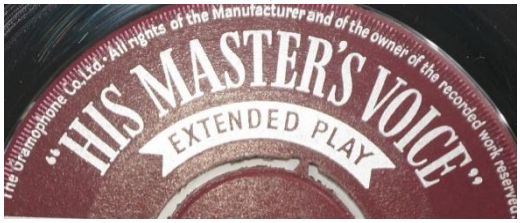
ただ、今では「レコードってなに？」というような世代も増えていますから、そもそもこの言葉に対する説明が必要になってくる時代です。これは、円盤状のものに溝を刻んで音楽を記録（record）したものです。ただし、ごく最近（といっても、40 年も前）発明された、音の信号をデジタル・データに置き換えて、そのデータを「穴」として円盤に刻んだ「コンパクト・ディスク」は、「レコード」と呼ばれることはありません。

その「レコード」は、材質の違いにより、２つの種類に分けられます。初期のものはまずエボナイト（高級万年筆の材料）でしたが、のちに「シェラック」という天然成分の樹脂が使われるようになりました。これが「シェラック盤」、あるいは「78 回転盤」と呼ばれるレコードです。78rpm(revolutions per minute/１分あたりの回転数)という高速で回転させるため、演奏時間が短く、割れやすい材質でした。日本では「SP レコード」という言い方が定着していますが、これは外国では通用しません。

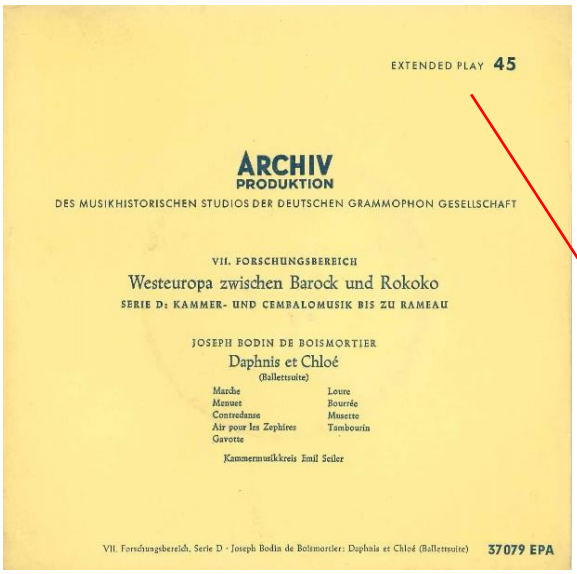
それが、材質をポリ塩化ビニールとポリ酢酸ビニールの共重合体に代えることによって、音の溝を細くすることができ、低速の回転数でも 78 回転盤をしのぐ音質が確保でき、割れたりすることもないという画期的なレコードが誕生しました。これは長時間の演奏が収録できることから、開発に携わったアメリカの COLUMBIA によって「LP(long playing)」と命名されました。それは 1948 年のこと、その規格は直径が 12 インチ（30 ㎝）、回転数が 33 1/3rpm というものでした。

それに対して、同じくアメリカの競争会社 VICTOR が、1949 年に同じ材質で直径が 7 インチ（17 ㎝）、回転数が 45rpm という別の規格を提唱、それを「45 回転盤」、さらには「シングル盤」、あるいは「ドーナツ盤」と称して、LP に対する覇権争いが始まります。そして、この２つのフォーマットは、先ほどの「シェラック盤」に対して、やはり材質に由来する「ヴァイナル（vinyl=ビニール）」という名称で統括されています。

ところが、同じ「ヴァイナル」でも、この２つのフォーマットを争う戦いはお互い一歩も譲らずに展開されることになります。その過程で、VICTOR は 1952 年に 45 回転盤の改良形として、より演奏時間を拡張した「EP(extended play)」という規格を発表します。その「拡張」の手法は、「レコードの溝の深さを浅くして、１インチ当たりの溝の本数を増加させるとともに、よりセンター近くにまで溝を切る」というものでした。それによって、それまでは片面での最長の演奏時間が５分程度だったものが、８分にまでに伸びた（extend）のです。これがその現物です。レーベルはイギリスの HMV（EMI）です。



さらにドイツの ARCHIV（DG）です。



このように、EP はアメリカだけではなく、ヨーロッパのレーベル（こんな渋いものまで！）からも、多くのアイテムがリリースされていたようですね。

ただ、そこまでしても、世界のレコード業界では LP はアルバム、45 回転盤はシングルという棲み分けがなされるようになり、結局 VICTOR も本格的に LP の生産を始めることになります。ですから、その時点でもはや EP は見捨てられてしまったのですね。そして、「シングル以上、アルバム未満」というコンセプトだけが残り、アメリカでは CD の時代になってもそのコンセプトのものをしっかり「EP」と呼んでいたのです。

日本での EP 事情はちょっと複雑です。最初に国産の 45 回転盤が製造されたのは 1954 年だったのですが、その時に作られたのが「EP」だったのですよ。つまり、日本人は、本来の 45 回転盤を知る前に、EP と出会ってしまったのですね。それに拍車をかけるように、レコード会社でさえも、普通の 45 回転盤と EP を区別しないで販売していたところもあったのだそうです。そんなところから、「EP=45 回転盤」という認識が生まれてしまったのでしょうね。ですから今でも、プロのカッティング・エンジニア（レコードの元となる原盤に溝を掘る作業を行う職人）でさえ、「EP の extend は、回転数を上げたために音質が extend されたことに由来する」などというデマを本気で信じていたりするのです。

1960 年には、7インチ径の LP（33 1/3 回転）という、それこそ本来の意味での EP に酷似したものも発売されました。もちろん、これは「EP」とは呼ばれず、「コンパクト盤」、あるいは「コンパクト LP」と呼ばれていました。このフォーマットの出現により、日本では「EP」は姿を消すことになったのです。

（この部分は、下記の新しい情報に基づき、2023/4/3 に書き換えました）

http://tuesdaybreakheart.blogspot.com/2023/03/ep45.html

註：EP 誕生の詳細な経緯は、ネットにあったアメリカの音楽雑誌「ビルボード」のバックナンバーの記事から、EP の成り立ちを調べようというサイト（下記）を参考にしました。その記事の現物は、右のページに掲載されています。

https://microgroove.jp/2012/01/what_the_ep_extended_playing_originally_stands_for/

The Billboard

AUGUST 9, 1952 THE AMUSEMENT INDUSTRY'S LEADING NEWSWEEKLY PRICE: 25 CENTS

Victor to Distribute Extended Play 45's

Up to 8 Minutes Playing Time on Each Side, to Kick Off on Classical Singles

NEW YORK, Aug. 2.—National distribution of RCA Victor's new longer-playing 45 r.p.m. records, to be priced at about $1.42 plus tax, will begin at the end of August. The first release of these "extended play" disks, which contain as much as eight minutes of playing time on each side, will be limited to classical singles.

The additional playing time on the disks has been made possible by reducing the thickness of the lands (the raised portions of the disks), thereby permitting more grooves per inch, and by cutting the grooves farther into the center of the record. In other respects the record is the same as the normal 45 platter. At the present time, pop 45's contain about three minutes of music, and classical singles about five minutes.

Actually, the EP's have been on the market for some months in RCA Victor's classical 45 albums. This was previously reported (The Billboard, April 12).

Execs Explain Advantages

In announcing the EP's, Paul A. Barkmeier, vice-president of the RCA Victor record department, said that the new disks will permit "the recording of entire selections of certain types of classical music on a single side, as well as to reduce by half the number of records presently required in an album of popular music. This means greater value for the public."

Tho this new technique can be used in all fields of music, it is most adaptable for classical singles where many selections are too long for one side of the disk or for album sets, according to execs of the firm.

In commenting on the new disks, Victor execs pointed out that the growth of the LP business converted the classical trade to album-length selections, whereas before the introduction of the new speeds, 12 inch 78 r.p.m. Red Seal singles were fully as important to the firm volume-wise as Red Seal albums.

There are many short classical selections which require from six to eight minutes playing time. "Finlandita," "The Magic Flute Overture," "The Barber of Seville Overture" and many others are in this category. Until now each of these selections has been spread over both sides of a record. The new EP will enable one of these selections to be placed in complete form, on each side of the platter.

This enables the new EP to include double the present amount of music on the record at a considerable saving, according to the Victor spokesmen. They also pointed out that having the complete selection on one side will bring greater musical enjoyment to the public.

レコードの溝の深さを浅くして、１インチ当たりの溝の本数を増加させるとともに、よりセンター近くにまで溝を切ることによって、演奏時間を追加することが可能になった。